多難の八年間

前校長　阪部由松

芦中初期の三年間を山本校長先生の創業時代とすれば、私の八年間はまさに苦闘時代とでもいえるでしょうか。それから現代の隆盛すなわち飯野校長先生時代となるわけです。

十五年史には、いろいろと記事が出ることと思いますので、私はここに二、三主な思い出を書いて見ましょう。

まず一番苦心したのは焼けた芦中校舎を再建することでありました。戦後、中学校を高等学校に統廃合するに際し、文部省では焼けて設備のない中学校は廃校にするという考えがありまして、芦中も廃校の寸前にあったのです。

校舎再建につき県にお願いすると、芦中は芦屋市で校舎を建てる約束であるといって一向埒が明かぬ。そこで私は芦屋市当局へ芦中校舎を一日も早く設定することをお願いしたのです。いつごろでしたか、確か二月頃と思いますが、図表を用意いたしまして、中学校から高等学校へ昇格する年次経過を芦屋市会の協議会の席で説明して、芦中校舎早急設定の必要性を力説したのであります。その後私は市会議員方を戸別に訪問して重ねてお願いいしました。

また一方、芦屋高等学校完成期成同盟会を起し、地元の有力者達の御協力をお願いしました。この間、父兄や卒業生、職員、生徒も大いに尽力されたので、遂に当時の市長代理の杉岡さんが「校長さん、宮川をあけますよ」といわれた時は、ほっと一息つきました。当時の芦屋市当局の深い御理解並びに、今はなき杉岡市長さんの固い御決意には深く敬意を表する次第です。

第二は、今のあの大運動場の敷地です。とにかく焼跡でありますから、瓦礫山積し、おまけに鉄筋コンクリートの倉庫などがあり、大きな邸宅の焼けた堅固な基礎などあって、どうして手をつけてよいか、ただ呆然として見る日が続きました。たしか、あの当時生徒代表であったかと思うが、岸本昌弘君が「校長先生、いつになったら運動場になるのですか?」とたずねられて、私は答えようがなかったものです。幸にして芦中は当時、橋本君や有本君のきずいた野球の成績がよく、また

上級学校への進学状況もよかったので芦屋市当局も力を入れられ、殊に当時の県会議員堺谷留吉氏の御尽力などで着々と工事が進んだのです。私は新しい大運動場の一角に立って六甲連山をしみじみ眺めた愉快さは今も忘れられません。

さて校舎と運動場が出来たが、高等学校としての内容設備がない。そこで父兄会の方々の非常な御努力であの六百七十万円という巨額の県債を得られたわけです。まずこれをもって漸く一人前の高校として出発し始めました。

今一つ深い印象に残るのは、テニスやバレー等の第二運動場です。この当時まで生徒一人当り月額百円の設備資金を寄附していただいたのですが、一応学校の形態も出来、六百七十万という巨額の県債も得られたのだから、毎月の設備資金を廃する方がよいという強い意見がありまして、月々の設備資金徴集を中止したのです。あたかもその頃、今の第二運動場が入手出来そうな話を私は耳にした。そこでこのチャンスを逸してはならぬと決意しました。しかし二日万円くらいの資金がかかりますので、いろいろ考えたあげく、私は一旦中絶した設備資金の復活を考えたのです。これには内外に相当反対が起ることは必定と思いましたが、私は敢行する決心をしました。そこで当時の生徒自治会の代議員を集めて「この第二運動場を得なければ芦高は永久に好機を逸する。このためには私は職を賭してやる覚悟である。諸君は私の屍を越えてこれを獲得してくれよ」と熱心に頼んだ。至誠は通じて生徒はみな賛成してくれました。

以上、二三の思い出を書きましたが、今静かに考えてみると随分大きな事業であった。こんな大事業は私如き微力で決して出来ません。これはひとえに芦高歴代の父兄会長並びに役員方の絶大な御尽力と、一般父兄方、県市御同局、地元有志の御理解と御援助、及び卒業生や職員生徒の一致団結の結果でありまして感謝の外はございません。

最後に私の在任中の教育方針としては山本校長の方針をついで質実剛健の気風を養成することでした。そして学問とスポーツとを併行して盛んにしょうと思いました。

およそ学校の真価は、上級学校に入学した数によって決定せられるべきものではなくて、卒業生が社会でいかに活動するかによって定まるものと思います。それで私は芦高退職の際にも「本校のスポーツが衰える時、それは本校々風の衰微する時である。体育運動を盛んにすれば、従って気力も盛んになり、学問も向上するのである」といってお別れした次第です。